

縄紋の住まいの選び方

—富山の山と里と海辺、GIS分析から

はじめに

旧石器時代から近現代に到る日本列島の長い歴史において、その時代ごとの特色をもった生活が営まれた。それは色々な分野からなっているが、どのような場所に住まいあるいは活動拠点を設けたか、にはそれぞれの時代の特色が集中的に表れることが多かった。

ここでは、今から一万年数千年前にはじまり、紀元前千年前後まで、約一万年の長きにわたって存続した縄紋時代について、山・里・海辺それぞれにおいて、どのような場所に住まいを求めたかという点について、GIS（地理情報システム・空間科学）による分析によって、検討することとしたい。最後に、縄紋時代と弥生時代の住まいの選び方の大きな違いと、その違いを生んだ国際的な契機について述べよう。

宇野隆夫

1 富山の地形と環境（図1）

縄紋時代は、山や里（平野）における堅果類（ドングリ類）をはじめとする植物性食料の採集と狩猟、海辺の海産物の利用が特に重要な産業であり、その中には農耕の営み（栽培植物の管理と利用）も、含んでいたと考えられる。これらの生業を営んだ集落の選地の特色を考えるには、山・里・海辺の環境が近接して存在する地域をターゲットエリアにすることが近道であり、ここではその条件を満たすと考える富山県（越中）を取り上げた。富山県は約四二五〇平方キロメートルの領域に、富山湾、呉羽・射水丘陵をはさむ砺波平野と富山平野、およびそれらを囲む山地とからなっている。それは能登半島から飛騨・信濃という中部高地に至る、さらにスケールの大きな海辺―山地をつなぐ地域であると理解することも可能である。

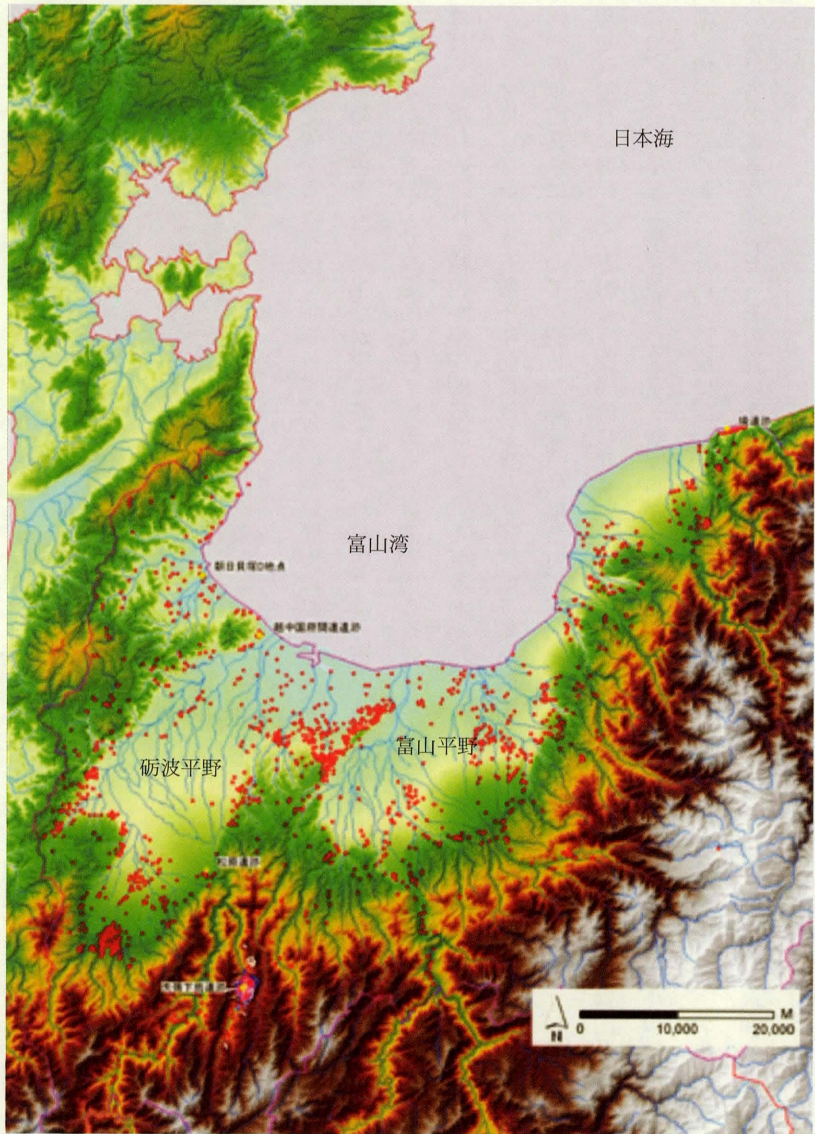


図1 富山と周辺地域の地形と縄紋遺跡

2 縄紋遺跡の密度分布 と立地地形

一四三二件の富山縄紋遺跡時空間データベースから、GIS密度分布分析をおこなった(図2~7)。この分析は遺跡分布の密度を地図上に濃淡で表すものであり、濃く表示されている地域ほど、単位面積あたりの遺跡数が多いことを示している。

また遺跡の立地地形を知るために、地形傾斜角度を横軸、遺跡の標高を縦軸とする散布図を作成した(図8~13)。この図ではドットの位置が、右ほど傾斜が急な場所、上ほど標高が高い場所に立地

北陸・飛騨・信濃を結ぶ古道は、鰯街道として、著名である。なお現代の気候では、平野部・里山・山麓部は照葉樹林帯、山地は落葉樹林帯・針葉樹林帯・低木林帯となっている。

していることを示している。

なおこれらの分析は、縄紋時代の大別の時期毎におこなった。その理由は、分析の対象とする地域が県レベルになると、精粗色々の情報をもつ遺跡を同時に分析の対象とする必要があるからであり、

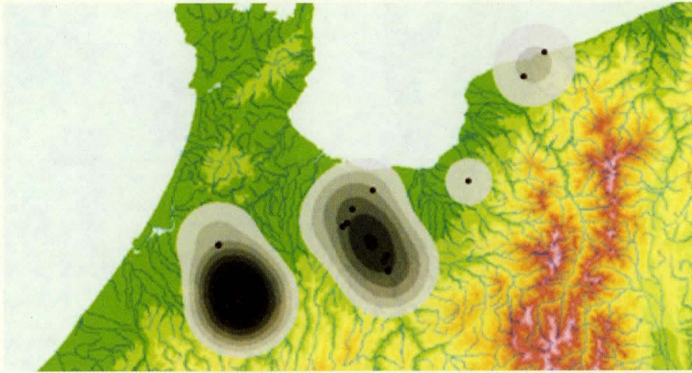


図2 縄紋草創期遺跡の密度分布図

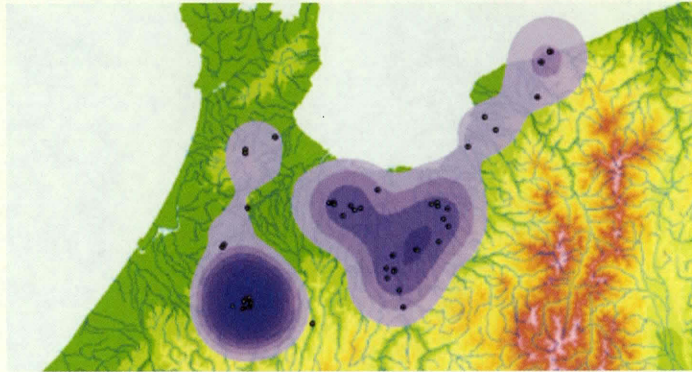


図3 縄紋早期遺跡の密度分布図

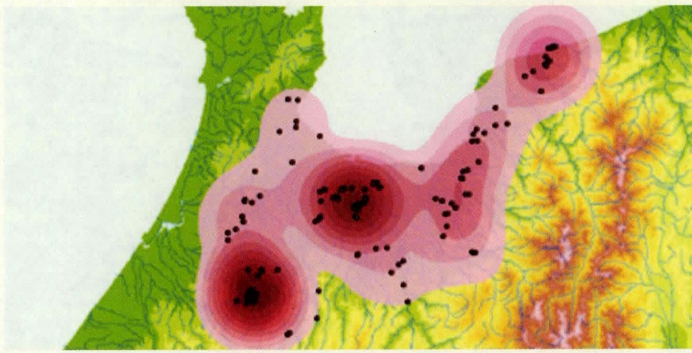


図4 縄紋前期遺跡の密度分布図

早期(図3・9)・・・分布の傾向は草創期と大きくは変わらないが、遺跡数は漸増傾向にある。そして標高五〇m未満の遺跡が増加して、地形傾斜角度五〜一〇度の場所に立地する遺跡が増加し、地形傾斜角度一〇度以上の場所に立地するものも現れている。山麓・里山から次第に低地と山地に住まいの場所を広げつつあったと考えられる。

前期(図4・10)・・・遺

縄紋時代における遺跡立地推移の大きな流れをみることを分析の目的としている。発掘調査が緻密におこなわれている小地域では、時期の区分をより細かくすることができるであろう。

草創期(図2・8)・・・遺跡数はまだ少ないが、砺波平野南部や、呉羽・射水丘陵から富山平野南部にかけての山麓・低丘陵地帯に主に分布している。砺波平野南部と呉羽・射水丘陵は、縄紋時代を通

して富山の二大遺跡集中地である。遺跡の標高は五〇〜三〇〇mに中心があり、地形傾斜角度は五度未満のものが多く、五〜一〇度のものが若干存在する。遺跡は、山麓部の安定した台地や解析谷の段丘の平坦な場所に立地することが多く、主に集落に近接した山と里の資源を利用する生活をおこなっていたであろう。海辺の集落の存在は、顕著ではない。

跡数の増加が著しいだけでなく、砺波平野南部、呉羽・射水丘陵域以外の地域でも、富山県西北部の氷見市や富山平野およびその東の地域にも、一定のまとまりをなす遺跡の分布集中地ができてきている。特に標高が低くて平坦な場所に立地する海辺の遺跡の増加が著しい。また標高三〇〇〜六〇〇mの高地に立地する山地の遺跡が増加して、地形傾斜角度二〇度以上の傾斜地にある遺跡も現れてき

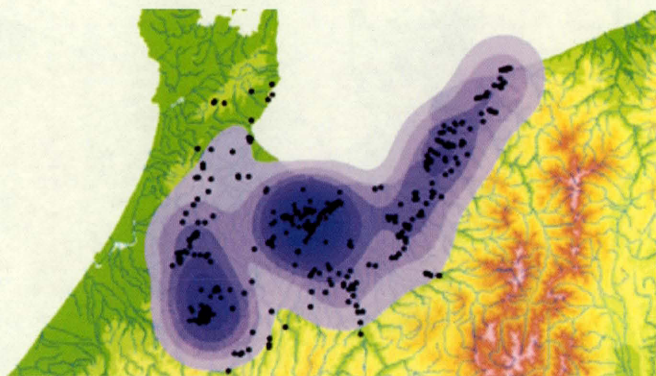


図5 縄紋中期遺跡の密度分布図

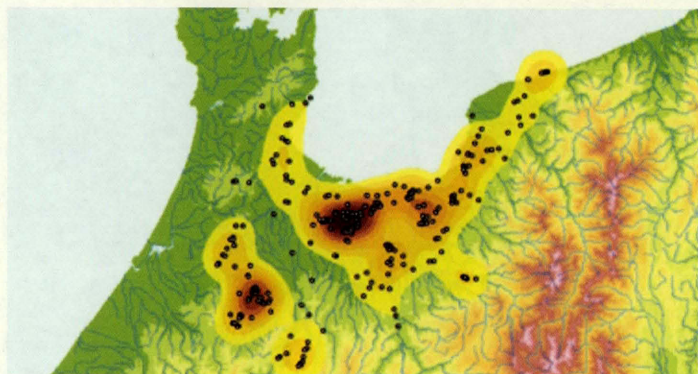


図6 縄紋後期遺跡の密度分布図

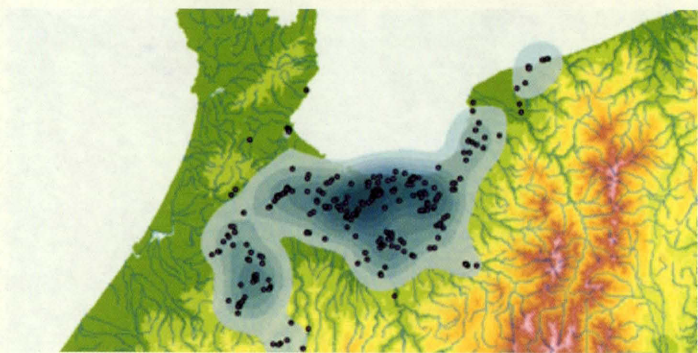


図7 縄紋晩期遺跡の密度分布図

も顕著な段階である。遺跡は海辺の低地から標高六〇〇m付近まで、また地形傾斜角度一五度まで数多く存在し、一五〜二五度の範囲にも一定数があった。さらに高い標高や急傾斜地にある遺跡も存在する。

縄紋中期から晩期へかけて、低地から高地まで広く居住地あるいは活動拠点として利用する在り方は、変わらなかったが、縄紋晩期

ている。貝塚のような確かな海の営みを確認できる遺跡が増加していることと、照葉樹林帯・落葉樹林帯の資源利用がなされたと考えられることからみて、山・里・海辺を活動の舞台とする当地域の縄紋社会の在り方は、この時期に確立したとみなすことができるであろう。

中・後・晩期・縄紋中期は、遺跡数の増加と広範な土地の利用がもつと

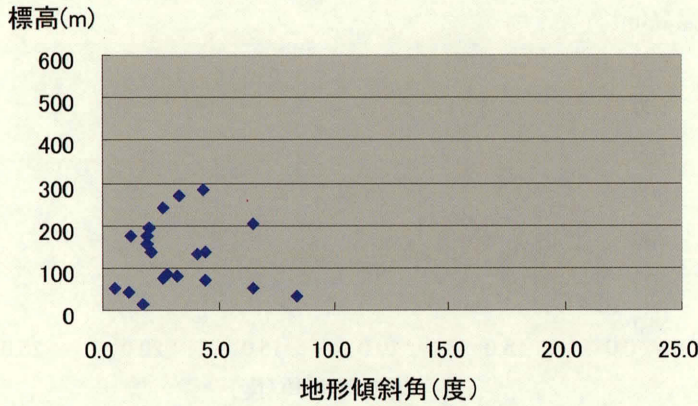


図8 縄紋草創期遺跡の立地地形

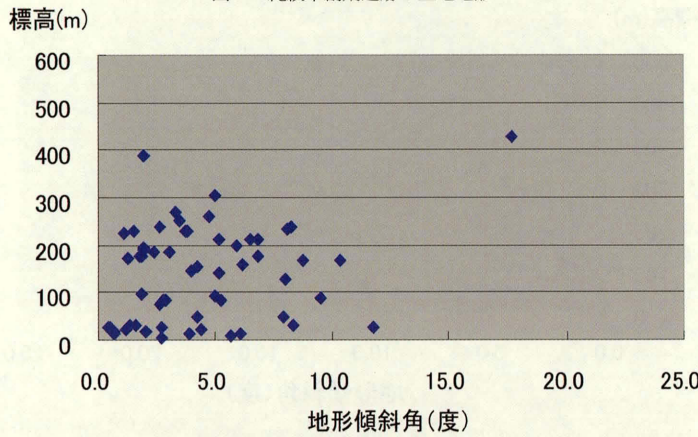


図9 縄紋早期遺跡の立地地形

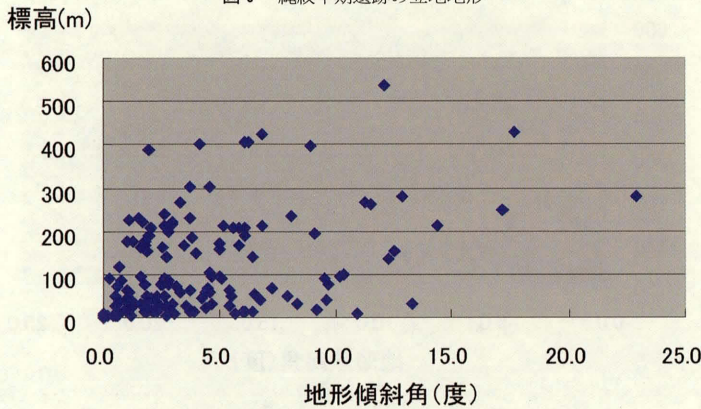


図10 縄紋前期遺跡の立地地形

には低地平野部の遺跡が増加する傾向があった。そして縄紋晩期遺跡の多くが、弥生時代の始まりの頃に途絶えることから、縄紋時代から弥生時代への転換期には、住まいの選び方において大きな変化があったことを推測できる。

3 縄紋集落からの眺望範囲と一時間歩行範囲

上の分析結果から、縄紋中・後期に、縄紋時代の典型的な住まいの選び方がなされたと考えて、この段階のいくつかの遺跡について、眺望範囲と一時間歩行範囲とを分析した。ここではそれらの内、海辺の集落として富山県氷見市朝日貝塚・朝日町境A遺跡、里の集落として砺波市松原遺跡、山の集落として南砺市矢張下島遺跡について示す（氷見市教育委員会 二〇〇二・二〇〇六、富山県埋蔵文化財センター編 一九八九、富山県埋蔵文化財センター 一九九五、南砺市教育委員会 二〇〇六）。

氷見市朝日貝塚（図14）…この遺跡は、日本海沿岸有数の大規模貝塚であり、縄紋時代前期から同晩期まで栄えた漁業集落である。日本で最

初に発見された縦穴住居のほか、大量の土器・石器・骨角器・玉類に加えて、マイルカ・カマイルカ・マグロ・カジキなどの魚類、アカガイ・ハマグリ・アカニシ・シジミ・バイ・アサリ・カキ・サザエなどの貝類という海産物の資料が多数得られている。なかでも外洋性のマイルカが沿岸で捕獲できるカマイルカよりも多いことが、特筆される。骨角器には漁具のほか、装身具類があり、鹿の骨角の

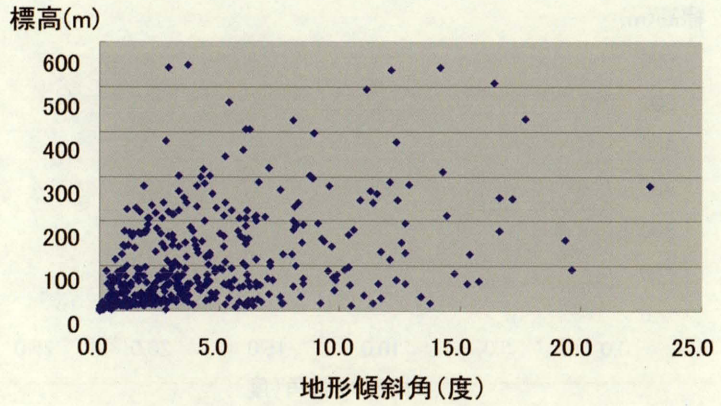


図11 縄文中期遺跡の立地地形

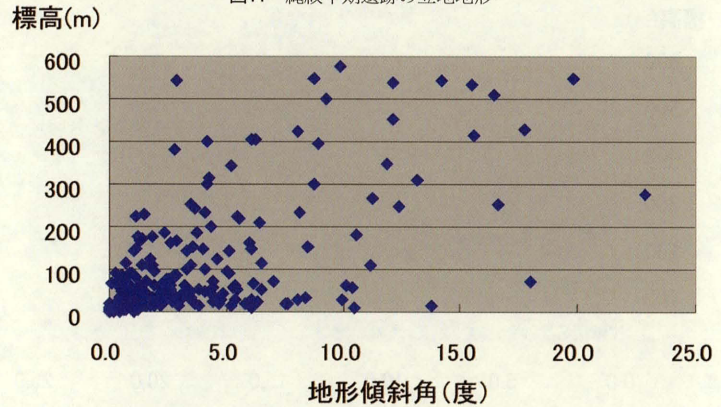


図12 縄文後期遺跡の立地地形

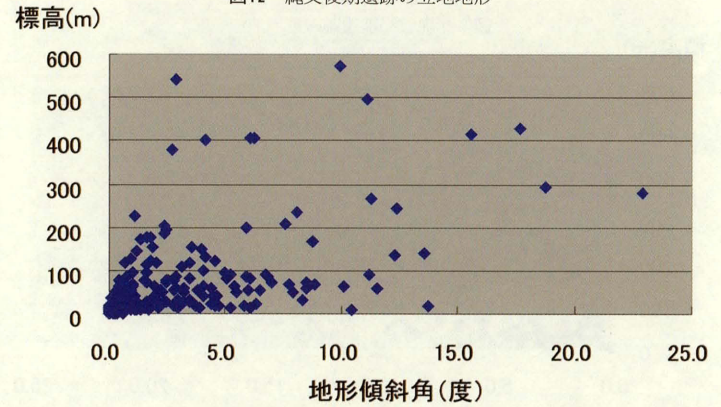


図13 縄文晩期遺跡の立地地形

いう生活資源のある場がよく見える場所にあった。陸の一時間歩行範囲（海の部分は、平地の歩行と同じ速度で航海した場合の移動範囲）は、東を海、北・西・南を丘陵で囲まれたコンパクトな平野の範囲にほぼ一致している。またその範囲には、同時代の縄文遺跡の分布密度が低く、その分布する遺跡も朝日貝塚と密接な関係をもった（季節的移動や分村など）と推定できるものである。

加工をおこなっていた。朝日貝塚からの眺望範囲の特色は、富山湾とその海岸線がよく見えて、外洋へ向けても広く眺望できることである。これに対して里（平野）や山への眺望範囲は狭く、遺跡の南に一定程度みえる地区もほとんどが旧十二町潟の範囲である。当遺跡は、海と潟と

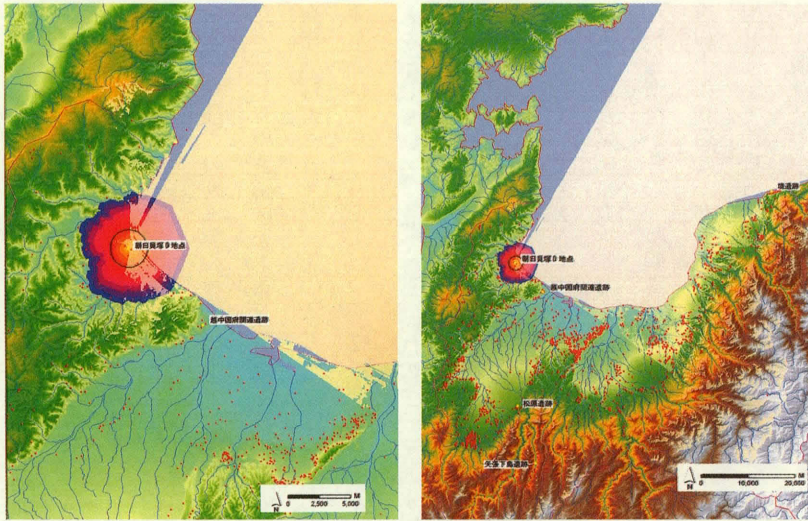


図14 水見市朝日貝塚からの眺望範囲と1時間歩行範囲

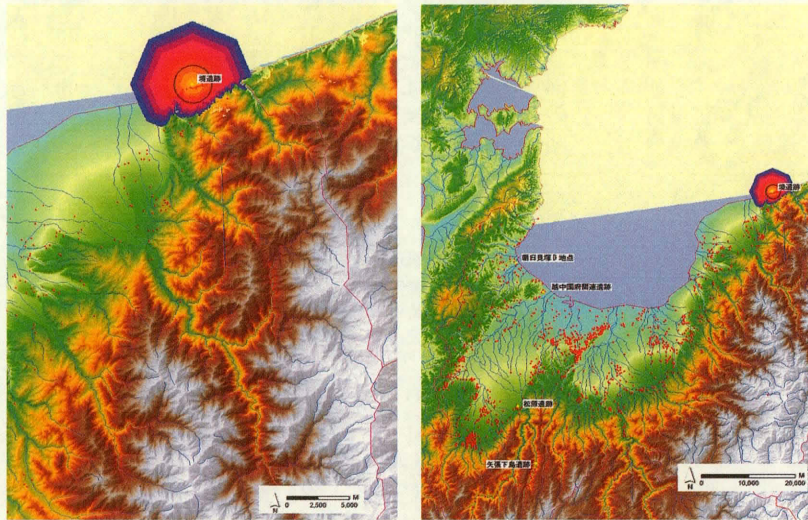


図15 朝日町境A遺跡からの眺望範囲と1時間歩行範囲

朝日貝塚からは鹿角をはじめとする獣骨やその加工品も出土している、海での漁業を中心としながら、里（当地域では照葉樹林帯）での狩猟採集活動も併せおこなっていたと推定できる。
朝日町境A遺跡（図15）…この遺跡は、縄紋時代中期から晩期ま

で、硬玉（ヒスイ）製装身具類と、蛇紋岩製石斧類を大量生産した海辺の手工業集落である。特に富山県東部から新潟県南部で採取できる硬玉製の装身具は、北は北海道から南は九州まで広く持ち運ばれた。硬玉原石が持ち運ばれて加工されることは稀であり、多くの場合は製品流通であるので、日本列島の有力な縄紋人は原料産地立地型の手工業集落の人々との交易で、その社会的地位の維持にとって重要な物資（Prestige good、適切とはいえないが威信財と訳す）を入手したものと推定できる（宇野一九九八）。稀に原石が遠隔地に移動する場合は、特に有力な縄紋人が、当地域の硬玉工人を原石とともに呼び寄せたと推定できる。

この硬玉の岩脈は海底にあるらしく、現代でも当地域の海岸（宮崎海岸、別名ヒスイ海岸）では海が荒れた次の日にヒスイ原石を採集できるが、現地の人々がこれを早朝に採取してしまう。よそ者がここで良い原石

を採集・加工することは難しく、日本列島各地の縄紋人は、互恵的
交易 Reciprocal exchange の形で現地の人々から直接・間接的に入
手することが基本であったであろう。

境 A 遺跡からの眺望範囲は、朝日貝塚と同様に海に開けていて、
日本列島最大の硬玉製装身具が出土した水見市朝日貝塚も遠望でき
た。そして境 A 遺跡から里（平野部）はほとんど見えないが、その
海岸線はよくみえた。このことは、富山の里や海の縄紋人がどこに
住んでいても、川をくだって海辺に出たら境 A 遺跡を遠望できたこ
とを示している。また縄紋時代の主要交通手段は丸木舟による沿
海・河川水運であり、硬玉製品を求めて当地域にきた日本列島各地
の縄紋人も、富山湾に至ると境 A 遺跡の位置を認識できたであろう。
境 A 遺跡は、原産地立地型の手工業集落であると同時に、流通の面
でも有利な場所に立地していたと考えることができる。

境 A 遺跡からの一時間歩行範囲を見ると、その陸地面積が朝日貝
塚以上に狭いことが分かる。この遺跡での生活用の石器量は、交易
用と推定できる石器・装身具類の量に対して微々たるものであり、
境 A 遺跡は手工業專業集落と呼んでよいものである（宇野前掲）。
このことは眺望範囲と一時間歩行範囲からも推定できようであろう。

砺波市松原遺跡（図 16）… 砺波市庄川地区にある松原遺跡は、砺
波平野を流れる主要河川であり越中と飛騨を結ぶ交通路でもある旧
庄川が山地から平野部に出た所の河岸段丘上にある集落遺跡である。

標高は一〇一 m であり、縄紋時代中期の多量の土器と多数の縦穴
（竪穴）建物と墓地がみつかっている。竪穴建物の一つは縄紋時代
の日本海域に特徴的な大型建物であり、この遺跡は砺波平野の重要
な集落であったと推定できる。

松原遺跡からの眺望範囲は、砺波平野の西部から西山丘陵裾にか
けて広く及んでいる。その北は富山湾に面した越中国府遺跡（古代
に国府がおかれた低丘陵）・岩崎鼻遺跡にまで、南は平野奥部にまで
及んでいる。松原遺跡と越中国府遺跡とは直線距離で三〇 km 近くの
距離があり、途中に森林があったことも容易に推定できるが、有力
な縄紋集落には環状列木や環状土塁などのランドマークとなりえる
施設を作ることが多い。松原遺跡が平野奥の谷口近くにあるが、海
辺近くまで遠望できる位置にあることは、意味があることと思われ
る。

これに対して松原遺跡の周辺については、かえって眺望範囲が狭
く、旧庄川にそった河岸段丘を中心とする範囲である。そして松原
遺跡から海と山への眺望に関しては、平野に比べると非常に限られ
ている。このことは砺波平野の縄紋集落におよそ共通していて、平
野部が眺望範囲の主要な部分を占めていることが多い。

松原遺跡からの一時間歩行範囲は、平野であるため、かなり広い。
そして松原遺跡周辺の旧庄川にそった帯状の眺望範囲が、この一時
間歩行範囲にほぼおさまっていることに注目しておきたい。この松

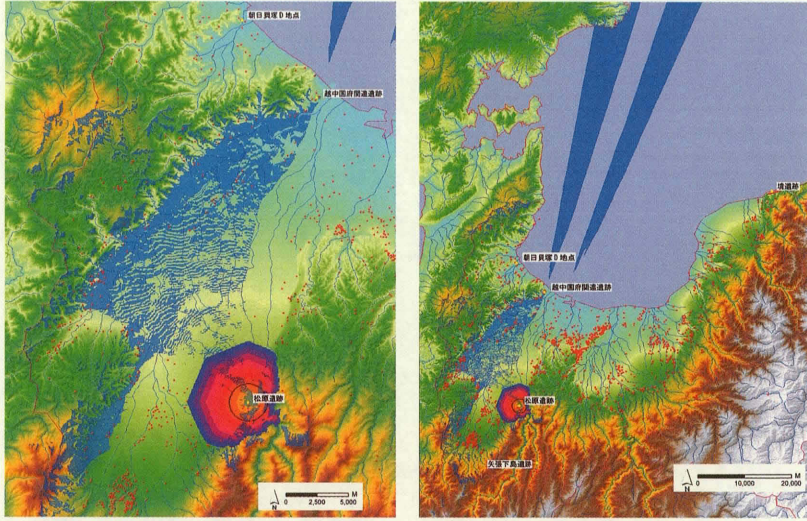


図16 砺波市松原遺跡からの眺望範囲と1時間歩行範囲

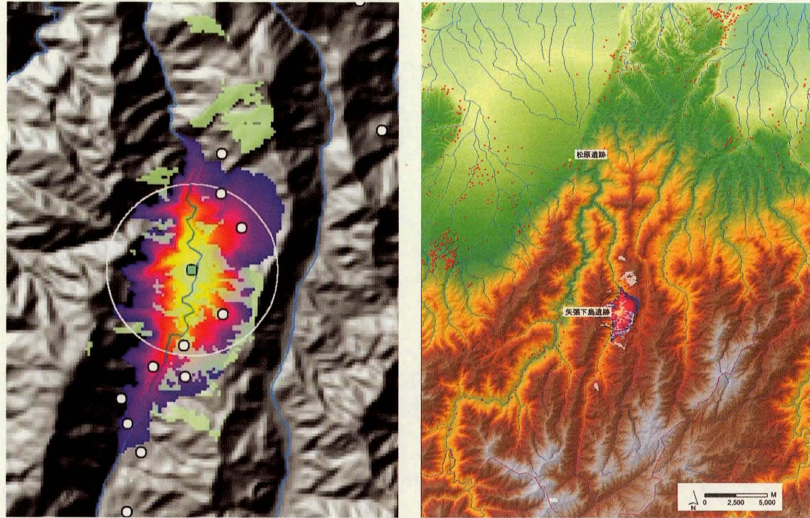


図17 南砺市矢張下島遺跡からの眺望範囲と1時間歩行範囲(円:半径1.5km)

原遺跡からの一時間歩行範囲の中にある眺望範囲は、松原遺跡の縄紋人が最も日常的に利用した空間であったであろう。また松原遺跡と同時期に存在した可能性が高い砺波平野の縄紋遺跡の分布をみると、松原遺跡からの一時間歩行範囲内に少なく、その範囲外で急増

する。詳細な検証が必要であるが、一時間歩行範囲はおよそ主要集落の資源利用範囲 (catchment area) であった可能性があるであろう。この範囲は照葉樹林帯であり、シイ・カシをはじめ、河畔林の多様な堅果類 (ドングリ類) や集落周辺の開地性環境の有用草本類、

また水辺に集まる中小動物類を利用できた。また庄川は現在、サケ・マスの遡上が復活しつつあり、縄紋人にとっても重要な食料源であったであろう。

なお松原遺跡からの一時間歩行範囲をおよそその資源利用範囲とする推定に大過がなければ、この範囲に隣接する縄紋集落の資源利用範囲は松原遺跡のそれと排他的ではなく、相互入り会い地が高い比率を占めていたと推測することになる。

南砺市矢張下島遺跡 (図17) … 矢張下島遺跡は、合掌作り建物の集落で著名な南砺市利賀地区の、標高四二〇mの地点にある山の縄紋集落である。この遺跡は縄紋早期から晩期

まで営みが続いたが、その盛期は縄紋中〜晩期にあり、建物や墓地や環状土塁に加えて、縄紋後・晩期の水さらし場遺構がみつかった。水さらし場は、堅果類のアク抜き処理をはじめ、水を使用する色々の分野の生産活動や祭の場になったと推定できる場所である。また富山県の海岸部との物流を示す蛇紋岩製石斧や、岐阜・長野県域とのそれを示す下呂石・黒曜石製の石器などがみつかった。

矢張下島遺跡は、地形傾斜が急峻な山間部の谷の段丘面でも、川よりの低い位置にあり、眺望範囲も一時間歩行範囲も非常に狭くて、里（平野部）や海辺はまったく見えない。図17右図の遺跡を囲む円は半径一・五kmであり、人や動物の動きをある程度視認できたと推定できる範囲である。矢張下島遺跡からの眺望範囲と一時間歩行範囲は、この円より東西はやや狭く、南北はやや広いがおよそ一致していると思われる。他集落との配置関係も考慮して、矢張下島遺跡の主要な資源利用範囲は、およそこの狭い範囲の中にあつたと推定しておきたい。

矢張下島遺跡は主に落葉樹林帯の資源を利用したと推定できる場所であり、水さらし場遺構はその森林資源利用の一端を示すものである。照葉樹林帯には多種・少量産出の有用植物性資源が多いことに対して、落葉樹林帯ではクリ・クルミ・トチなど種類は少ないが堅果産出量が多い樹種に富むことが一つの特徴であり、トチ加工品は現在でも利賀・五箇山地区の名産である。このような落葉樹林帯

の環境では、範囲は狭くても資源管理と利用を緻密におこなう方が、高い生産性が得られたであろう。

以上、海辺と里と山の特徴を示すと考える縄紋遺跡からの眺望範囲と一時間歩行範囲について示した。その特色は、海辺の集落は海を、里（平野）の集落は里を、山の集落は山がよく見えて、かつそこに往還しやすい場所に住まいを設けたことである。この眺望範囲や一時間歩行範囲は、当該遺跡の資源利用範囲（catchment area）と深く関わりと推定するものである。当地域の他の縄紋遺跡についても同様の分析をおこなうと、必ずしも画一的ではなく、遺跡ごとの個性をみることができると考えられる。しかし大勢において上記の縄紋集落の立地傾向は、富山県域に限らず、広く見ることができると考えている。

4 眺望範囲と一時間歩行範囲の連鎖

上では、個々の縄紋集落からの眺望範囲と歩行範囲をみた。ただし住まいの選び方を考える場合には、集落を相互にどのように配置していたかが、より大きな意味をもっている。このことを考えるために、眺望範囲の連鎖と一時間歩行範囲の連鎖とを分析してみた。

眺望範囲の連鎖に関しては、後世の越中・飛騨・信濃を結ぶ鯛（ブリ）街道と関わる地域の、縄紋後・晩期遺跡からの眺望範囲を重ねた（図18）。これはすべての縄紋後・晩期遺跡からの眺望範囲

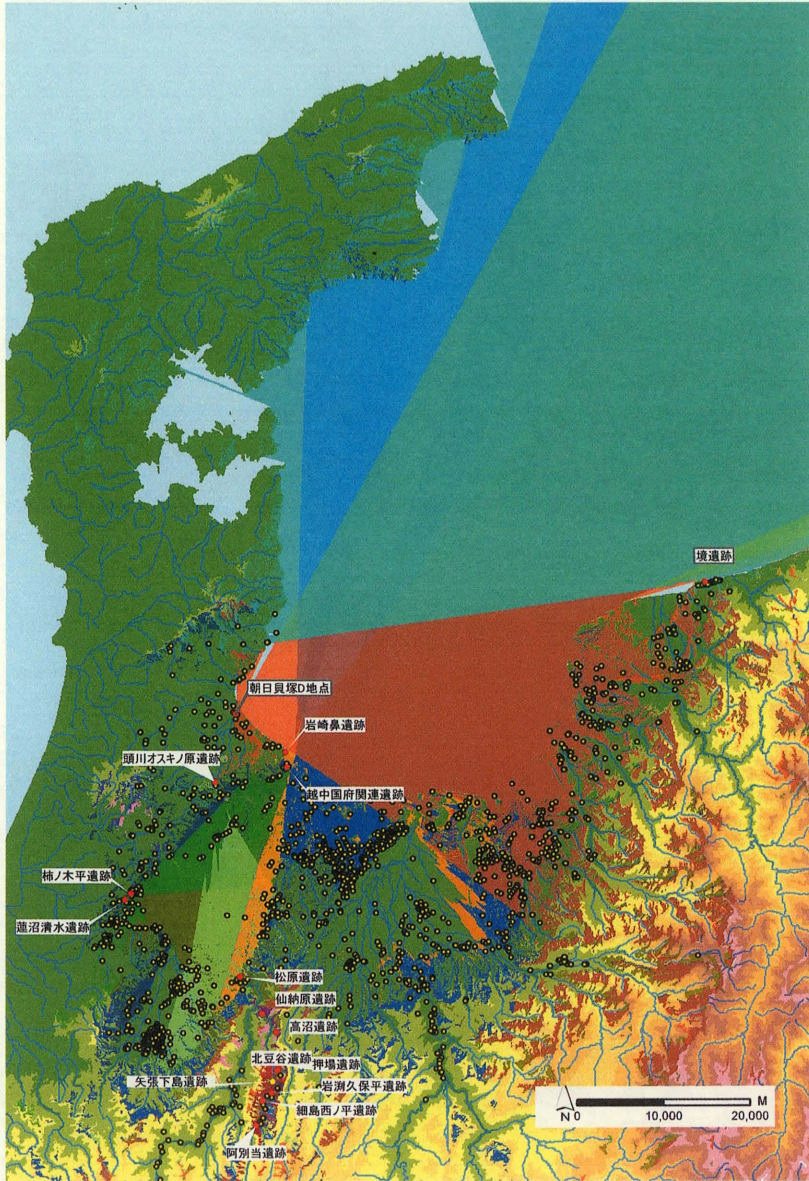


図18 眺望範囲の連鎖

を重ねたものではなく、前節でとりあげた遺跡からの眺望範囲の縁
 辺付近に位置する遺跡を選んで眺望範囲を重ねたものである。その
 特色は、眺望範囲が連鎖しながら、海・里・山を広く覆うというも
 のである。

このような現象が生じるのは、縄紋集落がその生業に適した場所
 に営まれたただけではなく、縄紋時代の盛期には、隣接する集落を相
 互に視認できたり、直接的には視認できなくても眺望範囲が重なつ
 たりする場所を周到に選んで、住まいを定めたからであると推察す
 る。矢張下島遺跡のような、
 山間の谷の眺望範囲が非常に
 狭い遺跡群でも、眺望範囲を
 重ねると連鎖するのである。
 それには色々の意味があつた
 であろう。

鰯街道の交通ルートが縄紋
 時代にも存在したことは、土
 器や石器の遠隔地流通から容
 易に推察できることである。
 縄紋時代の流通は生活必需品
 についても、硬玉製装身具の
 ような特別な価値を推定でき
 る物資の流通についても、弥
 生・古墳時代よりも広く活発
 であった(宇野前掲)。その
 一つの理由は、公権力が強ま

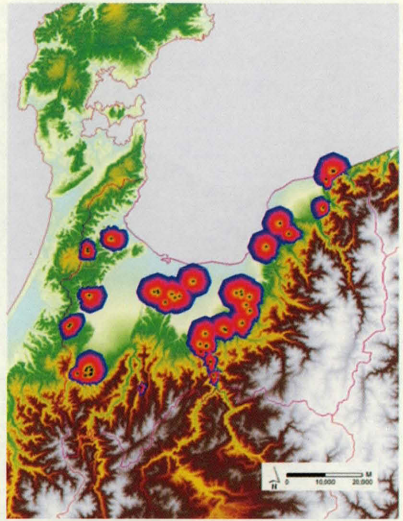


図20 縄紋早期1時間歩行範囲連鎖

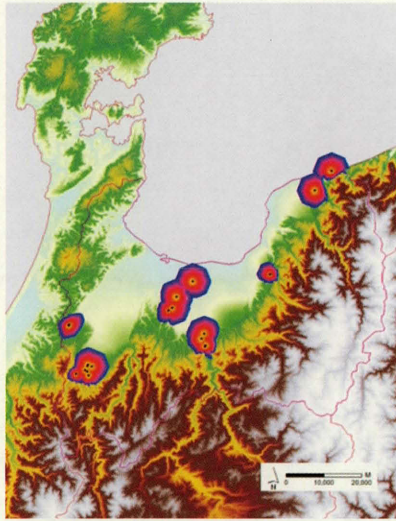


図19 縄紋草創期1時間歩行範囲連鎖

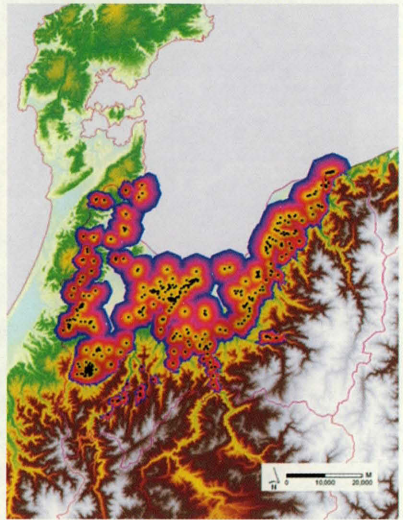


図22 縄紋中期1時間歩行範囲連鎖

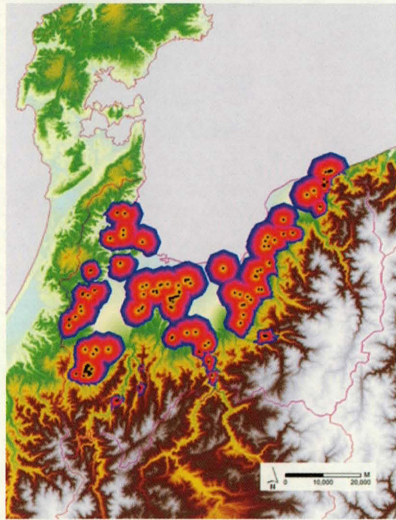


図21 縄紋前期1時間歩行範囲連鎖

ると、あるいは公権力を強めるためには、人や物の動きの管理を強化することが必須であるからと考えられる。ただし、縄紋社会側に、広域流通を実現する積極的な仕組みもあつたはずである。

眺望範囲の緻密な連鎖と広域流通は縄紋時代の初めからあつたの

ではなく、縄紋前期から晩期にかけて縄紋社会が充実する中で軌を一にするように形成されたものである。

縄紋時代の流通の一般的な形態がどのようなものであつたかは簡単には判断できないが、遠隔地に拠点的な物流がなされて人が遠距離に移動したと推定できる場合と、流通量が原地から消費地への距離の増加に応じて減衰することから集落ネットワークを通して連鎖的な交換がなされたと推定できる場合がある。ただし人が遠距離を移動する場合でも、地域の集落ネットワークと無関係に移動することは難しかったであろう。縄紋時代の盛期に、人が遠距離を移動する場合、例えば信濃・飛騨方面から越中に至った人は、最初の縄紋集落に至ると次の集落を視認しながら歩くことを繰り返して海辺まで歩けたということである。また集落どうしが直接視認できない場合でも眺望範囲が重なっていれば、在地の集落の人に次の集落が見える場所を教えてもらつと、

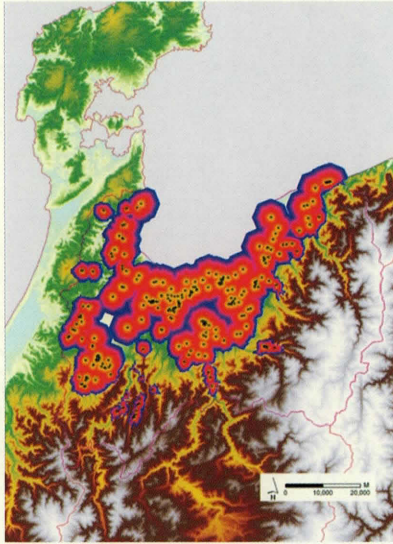


図23 縄紋後期1時間歩行範囲連鎖

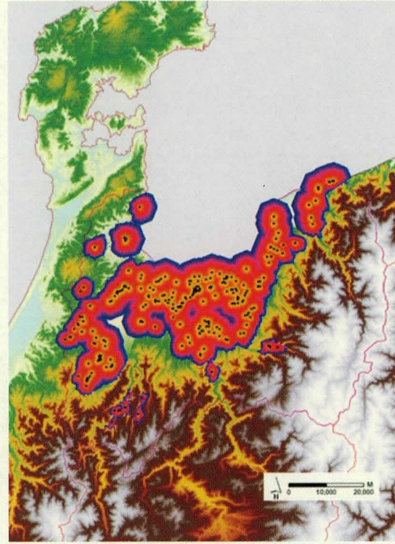


図24 縄紋晩期1時間歩行範囲連鎖

初めての旅人でも道に迷うことなく次の集落にたどり着けたであろう。反対に、丸木舟で富山湾に至った人も同じルートで飛驒・信濃方面に旅をすることができた。現実には視認を妨げるものも多いが、縄紋時代の盛期には東日本を中心としてランドマークになりえる施

設を活発に建設していることも重視すべきである。

在地の集落ネットワークという立場からは、縄紋時代盛期の集落数は狩猟採集を中心として農耕は付加的である社会としては密度が高いものである。他方、その資源をめぐる大規模な集団闘争なわち戦争を活発におこなった形跡は乏しい。その理由の一つに、個々の集落がそれぞれの生活に便利な場所に住む一方、全体として巧みな集落配置をおこなったことがあるであろう。また松原遺跡の分析で、集落の資源利用範囲が排他的な領域ではなく入り会い地的な在り方であったことを推定したが、このような在り方も色々な場面で推察できるものである。

このこと的一端を探るために、集落からの一時間歩行範囲を、縄紋時代の大別時期ごとに重ねた(図19と24)。縄紋草創期と早期では一時間歩行範囲が重なる地域がいくつかのブロックに分かれていたが、縄紋前期にはブロックの範囲が著しく広くなり、中期から晩期にかけてこれらがほぼ一つのまとまりをなすようになったことが分かる。それは縄紋時代盛期にこの地域では、どちらへ歩いても二時間以内で次の集落に着くことが多かったということである。縄紋社会はこのような密度の高い集落分布の状況の中でも、千々数千年の間継続する集落があることに示されるように、非常に安定した営みをおこなっていた。

結び

以上、富山県域の縄紋遺跡について、その盛期である中・後期を中心として、眺望範囲と一時間歩行範囲の分析から、その社会の特質とその形成過程について考察した。その結果、縄紋人の住まいの選び方について、二つの特徴があると考えた。その一つは、山・里・海辺の人々はそれぞれがターゲットとした資源の利用に最も適した場所に住まいを定めたであろうことである。もう一つは、縄紋時代に集落が増加する中で、巧みな集落配置をおこない、争いではなく安定と盛んな交流・物流を実現したことである。その基礎は、縄文前期から晩期にかけての緻密で周到な集落ネットワークの形成にあったであろう。

そのメカニズムをさらに探るには、全国的な比較と、詳細な分布・発掘調査が実施された小地域を限って細別時期ごとの分析をおこなうという、マクロとミクロの作業が必要である。また縄紋時代の集落増加と対応するように発達する各種の記念物（モニュメント）と祭器の分布のGIS分析も必須であり、今後の課題としたい。

最後にここで推定した縄紋時代の住まいの選び方の特色と弥生時代以後の顕著な違いについて述べる。弥生時代以後には、拠点集落が相互に視認できない場所を選んで立地したり、丘陵・山地に拠点を営む場合にも生活の不便を顧みず里や海を一望できる場所を選ん

だりすることが増加する（宇野二〇〇六a・b）。弥生時代の新しい在り方は、同時代のユーラシア大陸で広くみることができるとあり、当時の海をこえた交流によってもたらされたものである。山・里・海を一望する拠点を設けるということは、その眺望できる領域や行き交う人や物資を管理する指向をもった王権の成長と、深く関わっていたであろう。そのことは武器・武具と濠や土塁のような軍事施設の発達と表裏のものである。

縄紋時代でも弥生時代以後でも、限られた資源をどのように管理して有効に活用するかは同様に重要な課題であり、軋轢の種は常に存在したと思われる。その縄紋的解決法は善隣友好であり、弥生的解決法は遠交近攻であったであろう。それは人類の代表的な二つの知恵であり、今後の人類史をも左右するものと思われる。

謝辞

富山縄紋遺跡の時空間データは岡田一広（南砺市教育委員会）が収集し、GIS解析は山口欧志（日本学術振興会特別研究員）と駒野恭子（国際日本文化研究センター）の協力をえた。記して、感謝の意を表す。

私は一九九九年に国際日本文化研究センターに赴任して以後、考古学を中心としてGISによる国際・学際的な研究を推進している。このような研究環境を整えてこられた本センターの諸先輩に敬

意を表するとともに、それを発展させる努力を積み重ねていきたい。

参考文献

- 宇野隆夫一九九八「原始・古代の流通」『都市と工業と流通』古代史の論点第三卷、小学館。
- 宇野隆夫二〇〇六a「黎明期の氷見」「古墳時代と古代国家」『氷見市史』第一卷、通史編一、古代・中世・近世。
- 宇野隆夫二〇〇六b「眺望の日本列島史」『世界の歴史空間を読む―GISを用いた文化・文明研究―』国際シンポジウム第二四集、国際日本文化研究センター。
- 富山県埋蔵文化財センター編一九八九「境A遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告』朝日町編四。
- 富山県埋蔵文化財センター一九九五『年報』。
- 南砺市教育委員会二〇〇六『やまびとの生活―矢張下島遺跡の発掘調査成果から―』講演会資料。
- 氷見市二〇〇二『氷見市史』第七卷、資料編五 考古。
- 氷見市二〇〇六『氷見市史』第一卷、通史編一 古代・中世・近世。